

大阪やから 出合いが実る

晴レ
ルデ

ドレスの生地を選ぶ
水野信四郎さん

文・松井宏員 写真・岩本浩伸 デザイン・シマダタモツ

「晴レルデ」はしばらくお休みしましたが、「おもい-つくる」編を再開します。

ウェディングドレス専門のデザイナー、水野信四郎さんの作品集の話の続ける。2015年にアサヒ精版印刷が手掛けた作品集のグレードを一気に上げた秘密は、最新鋭の出力機にあった。

協力工場が導入したこの出力機に目をつけたマリさん（築山万里子さん）は「オンデマンドやけど、何かちゃうぞ」とうなった。オンデマンド印刷とは、版を使わず、パソコンなどからデータを直接、出力機に送って印刷する。小ロットで単価も安くできるメリットがある半面、色が安定しなかったり、精密なデザインの印刷には向かなかったりする。

一方、主流のオフセット印刷は、品質は高いし大量印刷には適しているが、小ロットには向かず、今回の注文の限定100部でも何百万円もかかる。

ところが、くだんの出力機はオンデマンドなのに「セミオフセットといわれるくらい、仕上がりがきれいで、アート紙をはじめ、色紙や透明紙など、いろいろな質の紙を使えた」とマリさん。その上、1枚ごとに紙質を変えることができた。さらにオフセット印刷の場合は何枚分かまとめて刷るので、裁断してページ順にまとめる丁合いという作業が必要だが、これはページ順に刷り上がってくるといふ優れたものだった。

もちろん、出力機がいくら優秀でも、それだけでキレッキレの作品集が出来上がるわけではない。印刷前の色補正、紙との相性確認や印刷時の色の微調整など、「職人さんの腕」が決め手となった。

十数冊のパンフレットから始まった話は、言い出しっぺの雑誌編集者、渡辺健太さんと水野さんに、渡辺さんがデザインを頼んだシマダタモツさん、そしてマリさんがかんで、あれよあれよという間に（といっても3年の月日がたっていたが）大きくなって、箱入りの超豪華な作品集に結実した。

その箱に巻いたのはイタリアのドレス用の最高級生地。「本に使うことはないですね」と苦笑する水野さんは、この作品集を「僕自身」と表現する。「作りのこだわりとか感性の部分が伝わる。そもそも僕が何者か、というのが見てもらったらわかる」

プレゼンテーションに作品集を持っていくなど、「分身」は活躍している。水野さんがうれしそうに披露してくれた話がある。この間、ロンドンに行ったときにミュージシャンの布袋寅泰さんに会って、作品集をプレゼントしたんだそうだ。「そしたら『すごい、水野君！』て、仲良くなっちゃいました」

作品集にかかった費用は、水野さんとプロデューサーを務めた渡辺さんが自腹を切った。それに値するだけの仕事だった、と渡辺さんは満足そうだ。「個人的には出版業が長いから、50代で残る仕事ができただけのがうれしかった」

東京と大阪で雑誌編集に携わった経験がある渡辺さんは、`大阪発、にこだわった。「ドレスだけではなく、シマダさんのデザインも、アサヒ精版さんの印刷も大阪」。そして、何より面白かったのは、人が出会うことで起きる`化学反応、だったと言う。

「東京では人のつながりだけでは無理。大阪は、ケンカしながらも人と人、等身大の人間同士の信頼関係でこんな仕事ができる」